

第17回練馬区医学会

18. 超音波ガイド下神経ブロック法について

練馬区整形外科医会

○ 風間 貴文、丸山 公、大国 央志、山田 新太郎
医療法人社団遼山会 関町病院 整形外科

【はじめに】

超音波ガイド下に行われる神経ブロック法の有用性と問題点について、症例を提示して検討する。

【対象】

男性11例、女性16例、年齢は9歳から91歳、全例、腕神経叢ブロック法、観血手術23例、骨折脱臼非観血整復4例

【結果】

27例中、24例は術中術後に有効な鎮痛効果を得られたが3例で効果が不十分であった。いずれも手技に問題があったと考える。

【考察】

従来、盲目的もしくは透視下で行われてきた腕神経叢ブロック法は、超音波ガイド下で簡便に行うことができ、正確性の格段の向上をもたらした。この方法は、観血手術のみでなく、外来診療での非観血整復にも有用性を発揮する。しかし手技の習熟、ブロック針や薬剤の選択を誤れば、効果が不十分となるばかりでなく、思わぬ合併症をもたらす結果となる。今後、さらなる手技の向上、他の神経への適応拡大、カテーテル留置、薬剤の選択など改善すべき問題があると考えられる。